

卒業生探訪

インタビュー

日本のスポーツや文化に一石を投じる—
誇りに思える選手や団体の発展のために尽力する岩越亮さん。
輝かしいスポーツ界は、目に見えない多くの人の支えがあって成り立っています。
強い責任感によって多くの壁を乗り越えてきた経験や、
その中で学んだことについてお話を伺いました。

聞き手・竹山まゆみさん(フリーアナウンサー/本誌編集委員)

アスリート・マーケティング株式会社代表取締役

岩越亮さん

Ryo Iwakoshi

1979年神奈川県生まれ。2001年
明治大学経営学部卒業。
自動車輸送会社、講演依頼代理
会社を経て、2005年に東北楽天
ゴールデンイーグルスの設立に広
報担当として参画。2011年11月
「ソスニック・コブ・スポーツ・ジャ
パン株式会社」を設立。2016年1
月に社名を現在の「アスリート・
マーケティング株式会社」に変更。
同代表取締役。



思いもしなかった 起業への道のり

—東北楽天ゴールデンイーグルスの設立に携わった後、現在の会社を起業された経緯についてお話を聞かせてください。

岩越 とある選手がメジャーリーグに挑戦することがきっかけとなり、球団職員の先輩からのお誘いもあって、アメリカのMLB代理人事務所の日本法人を設立することになりました。

設立にあたってはトラブルが多く、大変な苦労があり、正直なことを言うと絶望的な時期もありました。しかし、アスリートや引退された方のマネジメントをする会社なので、契約している選手や取引先への責任をしっかりと果たしたいという思いが強かったです。退団から起業までの経緯が大変だという噂を聞いて、複数のプロ野球の球団から「大変だったな……うちへ来ないか」とお誘いをいただくこともありました。その方が

楽なのかもしれないと思うこともありましたが、自分の性格なのか、契約している選手を置いて逃げるようなことはできませんでした。

つくり、発信。日本のスポーツや文化に一石を投じられる事業」という会社のスタンスがあります。契約選手にとって良い条件を獲得し、その活動を良い形で世の中に発信し、それが誰かの役に立って

ほしいということがモチベーションになっていきます。契約選手に何かあった時は全力で守ります。そんな使命感がありますし、経営者として社員を守ることも大切です。新型コロナウイルス感染症の影響によってイベントや講演の大部分が中止となりましたが、社員の給料は一切減らしませんでした。

大学での恩師との出会いと 見習いたい闘将の力強さ

—学生時代の思い出をお聞かせください。

岩越 クラスメイトと過ごすことが多かったですね、友人に恵まれました。大学ではゼミやサークルのメンバーと仲がいいという話はよく聞きますが、クラスメイトと、というと珍しがられます。卒業旅行も15人程で海外に行きましたし、今でも仲良くしています。

ゼミでは大石芳裕先生(経営学部教授)のもとで、グローバル・マーケティング論を学びました。厳しいゼミだったので体育会自転



のバスに乗り込もうとするのですが、いつも以上に記者が星野監督や選手たちにフラッシュを浴びせるので、私はそれを制止するのに必死でした。今振り返ると、報道をする側もされる側も混乱していたと思います。

その後、しばらく本拠地のある宮城県仙台市に戻ることができず、被災地の球団としてメッセージを発信することは難しい状況でした。しかし、地元の方にとってプロ野球選手はヒーローです。そのヒーローが遠くにながらも心配をしている、少しでも役に立てればと思っただけという姿勢を伝えるために、宿舎の一室で選手会長の嶋選手やキャプテンの鉄平選手が「地元のために何ができるか」を話し合っているシーンを撮影して、報道各社に発信しました。

——当時、選手会長の嶋選手のスピーチが話題となりましたが、岩越さんはどのように携わりましたか？

岩越 震災を受けてチャリティー

リーダーとしての 力強さを学びました

マッチが開催されることになり、その中で各球団代表選手がスピーチをすることになったのですが、日本野球機構から届いた原稿を確認すると、それは「がんばってください」という励ましの内容でした。私は、被災地の球団として「一緒にがんばりましょう」というメッセージを伝えるべきだと考え、球団代表に書き換えさせてほしいと訴えました。

スピーチを考えるにあたって大切にしていた視点は、「被災された地元



2009年10月、球団初のクライマックスシリーズ進出を決め、スターティングメンバー全員でのヒーローインタビューを先導(本人は左から2人目)



大石ゼミOB会「紫芳会」にて(本人は一番左、左から3番目が大石教授)

車部に所属していた私は苦労することもありましたが、マーケティングを学びたいという一心で懸命に取り組みました。大石先生は、厳しさの中に愛情がある方で、まるで自分の父親のようでした。今でも困ったことがあると大石先生に相談に行きます。

——スポーツに関わる仕事をなさっていると明治大学の関係者と関わる人が多いと思いますが、イーグルス時代には星野仙一監督

(1969年政治経済学部卒)との交流はありましたか？

岩越 一緒に過ごしたのは1年半ほどでしたが、私がイーグルスを辞めるときは、私がイーグルスに就いた後にも球場で挨拶すると、必ず「頑張っているか」と声をかけてくださいました。挨拶する度に感じていたのは、持ち前の力強さと、愛情でした。

——星野監督は中日ドラゴンズ時

代から、選手の引退後についてもご尽力されていたと伺ったことがあります。

岩越 言葉は少ないですが、愛情が溢れている方でした。私のような末端のスタッフのことも覚えていてくださり、さすがだなと思いました。

——岩越さんが頑張っていることを気にかけていらっしやっただけでしょうか。

岩越 星野監督が亡くなった後の話になりますが、新型コロナウイルス感染症の影響で、経営者として不安な時期がありました。その頃、テレビで星野監督率いるイーグルスが日本一を達成した時のドキュメンタリーが放送されていました。日本シリーズ第7戦の最終回、前日に完投して敗戦投手となった田中将大投手がマウンドに上がるシーンで、星野監督が審判に交代を告げる際、テレビカメラを意識してか、もったいぶるような仕草をされていたのです。そして球場に田中投手の名前がコールされ

ると、待っていたファンは瞬く間に1つとなって応援しました。その光景を見た私は自然と涙を流していました。自身のひとりで、あんな局面で選手とファンをさらにひとつにできる、星野監督の力強さを感じました。その後は、星野監督の語録を調べては自分を奮い立たせることによって、コロナ禍での不安な気持ちから立ち直ることができました。会社のリーダーとして、この力強さは見習いたいです。

震災という経験を通して 気づいたこと

——2011年に発生した東日本大震災。イーグルスで広報を担当していたとなると、大変な苦労があったかと思いますが。

岩越 震災発生時、イーグルスは兵庫県明石市の球場でオープン戦の試合中でした。球場は全く揺れませんが、ニュース速報が流れるとパニックになり、試合は中止になりました。監督、コーチ、選手が移動用



—— 当に感謝しています。
—— 仕事に対するストイックな姿勢は、アスリートのようですね。
岩越 そういう面はあります。アスリートと話をする際、会社経営と通じる部分、特にメンタルについては興味があり、「こういう時は、どう考えているの?」という質問をするのですが、その答えからアスリートのメンタルの強さに驚か

され、学ぶことがとても多いです。
—— コロナ禍ということもあり、今後に不安を抱えている学生が多いと思います。明治大学の学生に、メッセージをお願いします。
岩越 私は、3つの「や」で始める言葉を大切にしています。
「やりたい」こと。自分のモチベーションや想い。
「やれる」こと。自分が持って

いるスキル、得意・不得意、人脈など。
「やるべき」こと。使命感や責任感、ミッションのこと。
私は格闘技のマネジメントに携わったことがありませんでしたが、堀口恭司という非常に面白い選手に出会いました。今後のスポーツ界のためにも、この選手を発信したい、そしてそれが自分の使命であるように感じました。ノウハウがないので「やれる」ことではなかったのですが、「やりたい」「や

るべき」を大切に挑戦しました。経験を重ねることで結果がついてくるようになると、国内のみならず海外含めて人脈も広がり、今は「やれる」が業界トップになったと思っています。
進路の選択、人生の岐路での選択はもちろん、日々の些細な決断でも、その後の人生に影響します。常に3つの「や」を考え、一生懸命過ごしてほしいと思います。
—— 本日は貴重なお話を聞かせていただきありがとうございます。



2019年6月、マディソンスクエアガーデンで開催されたBellatorで堀口恭司選手が日本人初の王座獲得時にセコンドを務めた(本人は一番左、中央が堀口選手)

震災を経験して 世の中で何に役立てるか 考えるようになりました

の人がどう感じるか」ということと「どう伝えるか」ということです。特に後者はメッセージを伝えたくても、避難所ではテレビが映らないかもしれません。そこで、メディアが使いやすい言葉を入れることによって繰り返し報道され、伝わりやすくなることを狙いました。こうして生まれたフレーズが、「見せましょう、野球の底力を。見せましょう、野球選手の底力を。見せましょう、野球ファンの底力を。」「見せましょう、東北の底力を。」です。
—— 思いの懸け橋になることが広報のお仕事で、それを表現する人がしっかりと気持ちのせて発信しているんですね。

岩越 震災という極限状態に置かれて気づくこともありました。目の前に衣・食・住に困っている方がいる中で、そもそも今、野球は必要なのかという葛藤が選手や球団の中になりましたが、発想を転換し野球がこういう状況でどう役に立てるかを考えました。どのよ



うな職業でも、人が必要としているものに対して商品やサービスを提供し、それによって対価をいただきます。対価をいただいたのであれば役に立たなければいけないという考えで、球団として震災への対応にあたりました。

現在の仕事でも、この広い世の中で何の役に立つかということを考え、それを契約選手に伝えていますが、その原点はこの時の経験にあります。

仕事へ全力投球できる環境を支えてくれる家族へ感謝

—— これから挑戦していきたいこ

とを教えてください。
岩越 冒頭にお話をした「日本のスポーツや文化に二石を投じる」というテーマは変わりません。今の私は、それを実現するための会社の体制、規模、パワーを持たなければいけません。この変わらないテーマに挑戦しつづけるためにも、常に目の前の目標を着実に達成していくことが大切だと考えています。
—— プライベートではいかがですか?

岩越 仕事への意識が強いのでプライベートを充実させていきたいですね。よくストレス解消法を聞かれますが、ストレスは仕事上のものが多いので、仕事の問題を解決しなければ解消できないと考えてしまいます。それだけ仕事に全力投球できているということですが、逆に仕事で何かあった時に落ち込みすぎてしまうので、仕事とプライベートの最適なバランスを見つけていきたいです。

—— こうして仕事に邁進できる環境をつくってくれている家族には本

THE QUARTERLY MEIJI

明治

季刊

Vol. 88

2021 Winter

ISSN 1881-8579

特集

専門職大学院のいま

News & Opinion

コロナ禍を都市政策の歴史的な転換点に

前へ！ 明大アスリート

体育会ボードセーリング部 池田 健星

【特別寄稿】

文芸コンクールより最優秀賞をいただいて

この人に聞く

山井 太さん

株式会社スノーピーク
代表取締役会長



【今号の表紙イラスト】

駿河台キャンパス アカデミーコモン

「生涯教育の拠点」をコンセプトに2004年4月にオープン。社会に開かれた大学のシンボルとして、専門職大学院や社会連携機構などの機関が設置されています。建物の中心となる7階から11階までの吹き抜け空間には、トップライトに取り付けられたプリズムから、美しい虹が降り注ぎます。

140th
明治大学

明治大学は2021年1月
創立140周年を迎えます

THE QUARTERLY MEIJI
明治

〈第88号〉2021年1月15日発行 発行：明治大学経営企画部広報課

<https://www.meiji.ac.jp/koho/meiji/>

〒101-8301 東京都千代田区神田駿河台1丁目1番地 TEL.03(3296)4083

定価700円(税込)

